

子どもの「生まれ変わり」の信念が形成された背景

— タイの子どもの死生観との比較を通して —

宮田 延実 (人間環境大学)

Key Word 死後の世界、死生観、タイ、小学生

1. はじめに

日本の学校現場では、子どもに「死」について意識化させることは敬遠される傾向がある。しかし、若者の自死事件があるたびに、命の大切さを教育する必要性が説かれる。それよりも私たちは、子どもの死生観について理解する必要がある。死生観には、死に関する経験、自殺、死のタブー、遺言、死刑、死後生など、様々な概念がある。長崎県教育委員会(2005)の調査によると、死んでも生まれ変わるという考え方を支持する子どもが一定の割合で存在していた。これは自死を誘引する危うさがあると考ええる。

この長崎県教育委員会の「生と死のイメージ」に関する意識調査では、小学校高学年では15.4%、中学2年生では18.5%が人は死んでも生き返ると回答していた。すでに小学校低学年で死の現実的意味を理解しているにもかかわらず、中学生は小学生より高い比率で「生まれ変わり」を支持していたことが問題であると考ええる。このことから、本研究では、子どもが「生まれ変わり」の信念をもつに至った背景について検討する。

2. 幼児期に内面化される死生観

仲村(1994)によると、死の現実的意味を理解するようになると、やがて死後の世界への想像、願望、希望が膨らみはじめ、特に年齢が高くなるにつれて「生まれかわり思想」の増加が目立つという。このことはゲームやネット情報に触れる機会が多くなったことがひとつの原因と考えられる。しかし、これらの普及前より「生まれ変わり」を信じる子どもは一定数存在していた。

「生まれ変わり」を支持する小学生は、「家や誰かに聞いたことがある」「わからないがそう信じている」という理由が多かった。小学生以前に、すでに死後の世界について思いを巡らしたり、関心を向けたりする子どもがいる。それは親や身近な大人によって内面化されたと考えることに妥当性がある。恐らく幼児期あたりに「生まれ変わり」の信念形成につながるものが入手されたと考えられる。

3. 親のしつけの影響

日本では、古来より鬼を追い払う節分行事や秋田県男鹿半島周辺で行われてきた「なまはげ」などの年中行事がある。「鬼」や「地獄」などのイメージによって恐怖心を与えるしつけをする親は多い(親野、2013; 石神、2019)。また、千葉県の延命寺所蔵の地獄絵巻を元にして制作された「絵本地獄」(風濤社、1980)は、生前の悪行により、死後に地獄へ連れ去られ、残酷な報いを受けるという内容である。若者の自殺者を抑止する目的という。

これらには、仏教の影響が考えられる。鬼の話は仏教経典を通じてのインドの夜叉などのイメージ、中国の陰陽道のイメージが引き継がれている面が強いという(大満寺、2020)。

輪廻転生も宗派によって異なる意味をもつ。しかし、親たちは、仏教思想を切り取って、子どものしつけに活用するために、幼児期の子どもに地獄や鬼を出会わせてきたものと考えられる。子どもが死後世界のイメージを構築上で、本来の仏教思想ではないが、少なからずその影響はあると考える。

4. 仏教思想の影響についての検討

幼児期の子どものしつけに、「鬼」や「地獄」を持ち出す親は、特に仏教思想と自覚しているわけでもない。親自身もまたそのようにしつけられたから同じようなしつけを踏襲してきたと考えられる。

他方、国民の多くが仏教を信仰するタイでは、仏教思想を基に学校で道徳教育を行い、親もまた仏教思想を基にした家庭でのしつけを行っていると聞く。死後の世界については、生きているうちに善行を積むことが、生まれ変わりにそれなりに影響するという教えを信じて生活している。

このようなことから、タイの学校での仏教の教えや親のしつけ方、子どもたちの死生観について調査する。その結果を日本と比較することによって、子どもの死生観が形成された背景を明らかにする。

5. 仏教国タイについて

人口は2020年では6,980万人で、2016年におけるタイ人の平均寿命は男性71.8歳、女性79.3歳で日本人より8~10年ほど寿命が短い。また、2014年のタイの中央年齢は36.2歳で、日本の45.9歳と比べると若い国といえる。

タイ独特のものとして、2%ほど女性人口が少なく、30万人程の男性僧侶がいる。男性に兵役があることやトランスジェンダーが多いことが挙げられる。また、貧富の差が著しいタイでは、例えば、貧困層が癌にかかっても治療らしい治療が行われず、家族に見守られながら自宅で逝く事が多いと言われている。

6. タイの学校での調査

地方都市の方が人々の仏教信仰が厚いと考え、チェンライの学校を訪問し調査した。訪問校は、アヌバーン・チェンコン学校（小学1年から中学3年までの1372名在籍）、バーン・パー・ムアード学校（同、636名在籍）、ドイ・セーンジャイ学校（同、384名在籍）など、5小中学校である。授業視察、仏教教育の事情を学校長や教員、生徒からヒアリングを行い、質問紙調査を実施した。調査時期は2019年8月である。

7. タイの道徳教育

タイの学校での視察やヒアリングによると、道徳は社会科授業で僧侶によって行われている。命を大切にす題材や将来の夢や希望、生き方に関する題材はあるが、死生観を扱う題材はない。しかし、「善」を生きる上での重要な価値として、善行を重ねる程、来世はよりよく生まれるという教えを浸透させ、実践化をしている。訪問した小学校では、善行を実践すると証明する者がいればシールがもらえるという教育実践の説明を受けた。子どもに善行の奨励を求めている印象を受けた。

8. タイ人のしつけに関する考え方と方法

4名の年代の異なるタイ人に、自分が親の言うことを聞かないとき、どのような言葉を聞いたかについて聞き取りを行った。次のような結果であった。

20代男性	悪い子だったら地獄に落ちる、警察に逮捕されると聞いたことがある。
40代女性	親を叩いたら生まれ変わると手が貝葉のように大きくなる、親に反論したら、口が針穴のように小さくなると言われ、信じられている。
50代男性	悪い子だったら地獄に落ちると言われたことがある。
60代女性	悪い子だったら地獄に落ちる事はあまり聞いたことないけれど、親に嘘をついたら地獄に落ちると言われたことがある。

善行は奨励され、前世の行いによっては、人間に生まれ変われず、動物や昆虫になるとの教えがある。この聞き取りのように、悪い子だと地獄に落ちることや、将来自分に子どもができたなら、親の言うことを聞かない子になるという話も多い。良いことをしたら良い結果を得る、悪いことをしたら、悪い結果を得るという因果応報的な考えのようである。

いずれも、地獄に落ちることはあっても、鬼が登場することはない。また、親を大切にするというキーワードがあるが、家庭によって内容が異なる。

9. タイと日本の小中学生の死生観調査と結果

調査協力者は次の通りである。タイの小学校第4学年～第6学年（4年70名、5年112名、6年124名）計306名である。調査時期は2019年8月。日本の小学校第4学年～第6学年（4年104名、5年91名、6年102名）計297名、調査時期は2018年12月。4件法（当てはまる4点、当てはまらない1点）で回答を求めた。

Table 1 日本とタイの小中学生の死生観の因子の尺度得点の比較

	日本 (n=297)			タイ (n=306)	
	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差
長寿願望	3.46	0.57	>>>	2.92	0.59
効力感	2.82	0.58	>	2.70	0.54
孤独や生きる辛さ	1.69	0.64	<<<	1.97	0.68
生活への満足	3.12	0.65	>>	2.94	0.63
死後生への信念	2.75	0.79	<<<	3.10	0.62

>>>は0.1%水準、>>は1%水準、>は5%水準である。

タイと日本の調査協力者のデータを合わせて因子分析により5因子を抽出した。「いのちがなくなるのはおそろしい」「できるならずと長生きをしたい」等の質問項目で抽出された因子を<長寿願望>と命名した。同様に、「自分はよくほめられるほうだ」「自分は頑張ればだいたいのはうまくできると思う」等の質問項目を<効力感>。「友達といるより、ひとりでいる方が好きだ」「生きていくことがつらいと思ったことがある」等の質問項目を<孤独や生きる辛さ>。「学校は楽しい」「ここで暮らしていることに満足している」等の質問項目を<生活への満足>とした。また、「天国とか地獄はあると思う」「いのちの

長さは何かによって決められていると思う」を「死後生への信念」とした。

これらの因子の尺度得点の平均値を日本の小学生とタイの小学生の比較を t 検定によって行った (Table 1)。

その結果、日本の子どもは、「長寿願望」、「生活への満足」「効力感」の平均値が有意に高く、タイの子どもは、「孤独や生きる辛さ」、「死後生への信念」が高かった。特に「長寿願望」、「生活への満足」は、日本とタイの両国で高い平均値であった。

10. 考察

(1) タイの子どもは日本の子どもに比べ、孤独や生きることに辛さを感じている子どもがやや多く、長寿はそれほど期待していない。

タイ国内には経済的な格差があることや、生活への満足感が低い。また、タイ人の平均寿命は日本人より 8~10 年ほど短く、中央年齢が 36.2 歳で高齢者が少ないこと、家族など身近な死に接することが日本より多いこと、さらには、孤独や生きる辛さを少し感じるなどから、タイの子どもはそれほど長寿を期待していないと考えられる。

(2) タイには善行により生まれ変わる思想があるが、日本では枠組みがないため自由な死後世界の解釈がなされる可能性がある。

日本では鬼や地獄を持ち出すしつけにより、幼い子どもに恐怖感をもって死後世界を想像させるものになる。しかし、年齢が上がると実態のない鬼は否定され、地獄のイメージがあっても仏教思想は曖昧なものとなる。そして、その時に入手するメディアやネット情報、人から聞く話などから、死後の世界への想像、願望、希望が膨らむ。その際、タイのように善行によって救われるという行動規範が明確ではないため、日本の子どもは、各自の都合のよい解釈がなされ、単に願えば生まれ変わりができるという思想も現れると考える。

日本では、仏教思想の影響はあるものの、死後の世界のイメージについて国民が共有する仏教思想という枠組みが異なるといえる。

(3) タイでは「生まれ変わり」思想は、自死を誘引するものではない。

タイでは、善行が少ないまま自死すると、来世は人間には生まれ変われず、動物や昆虫になってしまうため、容易に自死は選択し難い。逆に、善行が多いと賞賛を受け効力感も高まるので、自死を選択するのは考えにくい。これらのことから、タイの善行を奨励する仏教思想は幼児期から内面化され、死後世界を想像させるものになるが、自死を誘引する信念ではないと考えられる。しかし、日本では、都合のよい死後世界についての解釈がなされる可能性があり、危うさは否定できない。

11. おわりに

本研究は限られた調査、情報であったため、日本の子どもの「生まれ変わり」の死生観の形成背景が十分明らかになったとは言い難い。しかし、日本はタイのような、仏教思想の価値観や枠組みが薄いことから、児童期以降は死後の世界について各自の都合のよいイメージや発想ができてしまう。それが夢を膨らませるか危ういかは、その時々情報にもよると考えられるが明らかではない。今後、さらなる情報や分析を行うことにより研究を深めたい。

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 JP18K02374 の助成を受けたものです。